

「トンボの話」

23生 加藤 正暉

僕ほど大学に入ってトンボを追いかけてまわしたやつはいない！と、宣言してみたりする。(実際、この大学でトンボの研究をしている人がいらっしやったらすぐに撤回するつもりである)

ふだんトンボなんてスルーの対象でしかない！っていう人が圧倒的？でもちよつと目を凝らしてみよう。広大にはいろんなトンボがいるんです。それでもってトンボのデザインに要注目！

夕日みたいに真っ赤なやつ、パステルカラーの水色、まさにレモン色！ってやつもいたりする。だけどこいつらはちいさくてすばしっこい！

コノヤロウ・・・と思ったらなにやらあつちへヒラヒラ、こつちへフラフラ、黒いチョウがとんでいる。

こいつの名前は文字のごとく「チョウトンボ」。チョウみたいに飛ぶけどれっきとしたトンボ！(実は今まで、一匹しか見たことがなくてこんなにたくさんいるのはおどろきの一言)色は青紫っぽくみえる。ひじょーに美しい！

実はスペイン広場にも2、3羽でやってきて踊っています。このトンボ界ののんびり屋さんは植生豊かな池沼に住んでいます。

つまり広大は豊かな植生を育むことができるぐらいののんびりしてとてもいい環境の証だったりする。

もしこの広大からチョウトンボが姿を消してしまったら、それは大学がのんびりした空気を得ることのできない大学になってしまったということになってしまいうndらうか？

来年も再来年もこの飛翔な日々「今年もチョウトンボがいます」と書けるような大学であって欲しいと思います。



「心に着地する言葉」

21生 平野 詩歩

私は小学生の頃から詩を書いてきた。私にとって詩を書くことは、湧き出す感情を可視化することで自分と向き合い、整理するためのものだった。しかし、高校時代に校内の伝統行事である「詩のボクシング」(※参照)において自作の詩を全校生徒の前で朗読して以来、私にとって詩を書くことの意味は、自分の外へ自分自身が様々な分野に関してもった意見や抱いた疑問を発信することへと変化した。

詩は、作者の人生観や書いた時の心情を反映する。それはその人の一部であり、全てである。だからこそ柴田トヨさんの「くじけないで」に書かれた言葉は人々の心にしっかりと響くのである。私が高校時代に書いた片思いの詩が大勢の共感を得たのも、その中の言葉たちが人々の心にしっかりと着地してくれたからだと思う。

心に着地しいつまでも残るような、良い意味で刺激的な言葉は、私たちのありふれた日常に溢れる言葉たちの中に、ごく稀に、しかし確実に存在していると私は考えている。その言葉を見つけ出し素直に感動すること、そしてその言葉を自らも生み出すことが、言葉を持つ全ての人に与えられた使命であると私は考える。

※「詩のボクシング」とは

ボクシングリングに見立てたステージ上で、2人の朗読ボクサーが交互に自作品を身体全身を使って朗読し、どちらの声と言葉がより観客に他者に届いたかをジャッジが判定する「声と言葉のスポーツ」、

「声と言葉の格闘技」とも呼ばれている。映像作家で音声詩人の楠かつのりが、平成10年10月に日本朗読ボクシング協会 (JAPAN READING

BOXING ASSOCIATION=JRBA)を発足し、2人の朗読ボクサーが交互に10ラウンド朗読して闘うタイトルマッチが行われたのが、その始まりである。平成12年7月には、楠氏が独自のルールと判定方法を考案し、日本朗読ボクシング協会のオリジナル企画として一般参加の「詩のボクシング」トーナメント戦を始めた。これが「詩のボクシング」として広く認知されている。

「夏い暑」

23生 高井 大輔



私の声を聞くと、顔をあげてくれた。

瀬戸内海の島を巡りに自転車で旅に行ったときのこと。

2月下旬、よく晴れた空は冷たく澄んでいた。海の上を走り抜けるのは、それは爽快で。島のほのかなミカンの香りがその心地よさを引き立てていた。女子4人でままチャリをぶっ飛ばすという最高にファンキーな旅。次の日どこの筋肉痛よりもお尻の皮が痛かったことは言うまでもない。

1人のおじいさんの話をしたいと思う。

ある島で、上陸して走りつづけるもの人がいない。あるのはみかん。みかん。みかん。そして海。朝から走り続けていたためお腹がすいている。なんでもいいから店にたどり着きたい。ただ無言でこぎ続けていると、前方に人陰が見えた。もう次の島までこぐしかない諦めかけていた私たちにはその陰がきらつきらして見えた。

近づくにつれてその人がおじいさんであるとわかってきた。背は低くて痩せている。もんぺのようなズボンに、トレーナーをだぼっと着て、チョッキを羽織って、毛糸の帽子を被っている。

「すみません!!このへん食べるとこありますか?」

おじいさんは、腰は曲がっているものの1人でポツポツ歩いていった。歩幅は小さくて足取りもぎこちないけれど、確実に地面を踏んで、ゆっくりと、しっかりと。

杖や押し車は使わない。両手をしっかりと後ろで組んで一步、一步。

「どこからきたの?」

「尾道です」

「ほうねえ」

「お昼食べたんですけど、どっかお店ありますか?」

「ここをねえ…」

強烈な広島弁で、もう少しいけばお好み焼きがあると教えてくれた。すぐつくりしい。

「ありがとうございます!」

そしておじいさんはまた、ゆっくりと足を踏み出した。

そこで初めておじいさんの背中を見た。繋いだ両手を支える背中は、小さくてたより無さそうだったけれど、青い空と海と広大なミカン畑にむかって、右、左、右、左、と進んでいく姿はどこかたくましく、どこか勇ましく見えた。

おじいさんと別れて、私たちは言われた通りまっすぐ走り続けた。どのくらいいだろうか、空腹と期待から私たちは変わらず無言だったのだが、未だみかんしか見当たらない。数十分後にやっとたどりついた。

走りながらわたしは思った。おじいさんはあれからどこに向かってい

たのだろう。見る限りはみかんしかなかったのに。そして、あの速さで歩くおじいさんは、この距離がすぐなのだろうか。

このママチャリの旅でこのおじいさんに教えてもらったことは、お好み焼きの場所と、

地に足つけて、信じて進み続けること。

「秘密のゲーム」

23生 益田 征哉

ここはとある大学生の家である。ここに、大勢の人達が集まっていた。どうも合班をしているらしい。一方の班は何やら皆目をつぶっていて沈黙する者、軽くしゃべる者といった。もう一方の班はなにやら動き回った後でしばらくしてお互い何か話したようだった。

そしてAでない誰かが「Aです」とAみたいな口調で一声上げる。するとA以外の誰かがまた「違うって、違うって」と同じようにAみたいな口調で言う。さらにAが「フェニクス」とみよーな発音で一声上げる。そしてまたA以外2人がなにやらAに似たような声で一言。そしてもう一方の班は顔を上げて言う。「3番目がAだ」「えっ、1番目がAじゃないの」とそれぞれ言い合う。話し合った結果「3番」と答えを合わせる。「正解」とAのいる班は言う。

これは「Aゲーム」と呼ばれる。このゲームはこんな風にAという人間を声であてるものである、Aの声は特徴があるため、このゲームは生まれ。

「じゃあ、もう1回いくよ」とAの居る班員の1人は言う。ゲームは再び始まった。「違うって、違うって」と真ん中辺りが変にあがる声が聞こえた。「フェニクス」という前の辺りを強くする声が聞こえる。「Aです」という少し照れ隠しのような声が聞こえる。「フェニクス」という先ほどの発音とは異なりフェの部分に強調された声が聞こえた。「Aです」と少し高めの声が聞こえた。さて、もう一方の班は先ほどと異なりものすごく悩んでいた。「1番じゃないか」「いや、5番じゃないか」と暫く悩んで「うーん、どれがAかって言われても……」

……Aは静かに笑っていた。

*この話は若干のフィクションを含んでいます。

23生 金子 久誉

僕は今年になって初めて、広島の平和記念式典に参加した。

生まれも育ちも広島で、小学生のころからずっと平和学習をしてきたにもかかわらず、平和記念資料館や原爆ドームを見学したことはあっても、式典に参加したことはなかった。

なぜかというところ、式典は八月六日、すなわち夏休み中におこなわれる。式典を見るのはいつもテレビ越しで、時にはまだ夢の中ということもあった。僕の実家は平和公園から自転車で10分もかからないところだったのに、式典に参加しようという気は起こらなかった。それだけ、平和について興味がなかったのだ。

時間の制約という理由もある。小学生のころから野球をしていて、夏

休みは肌を真つ黒にして、朝から練習に打ち込んでいた。もちろん、練習が午後からで午前中があいていても、式典を見て黙禱をささげるのはテレビ越しだった。

そんな僕が、大学に進学してもあますほどの時間ができ、今年は式典に参加することができた、いやしようと思った。それは大学に入って、平和について真剣に考えるにつれて、関心が強まったからだ。

ここで話をもどそう。式典では広島市議会議長、藤田博之氏が式辞の中で、

「私たちはこれからも、被爆の実相と平和の尊さを訴え続け、平和を希求する人たちと共に手を取り合って、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現のため、全力を尽くすことを、ここに改めてお誓い申し上げます」と述べた。

広島は毎年世界に向けて、核廃絶を訴え続けている。僕も、非人道的で絶望しか残らない核兵器など、この世から存在しなければいいと思う。だけど、広島市長が繰り返し訴えているように、世界各国——とりわけ核保有国は、核実験をやめない。アメリカに至っては、核兵器の数を減らすといいつつ、臨界前核実験を行っている。この現状を見て、はたして被爆の実相と平和の尊さを訴え続けられれば、核兵器はなくなるのだろうか。アナキー（無政府状態）と呼ばれる国際システムの中で本当に核廃絶は可能なのだろうか。僕は理想ばかりが先行して、具体策（かつ有効策）がついてきていないように思える。

更にこの言葉では、世界恒久平和の実現がうたわれている。小学生のころからも、平和学習でこう習ってきた。確かに、世界が平和になれば、みんなが安心して暮らすことができる。しかし、世界の前が平和になる前に、日本が平和にならないといけないということを、多くの

人は見落としている。平和を訴える者が平和でなければ言葉の重みが減るのは当然のこと。それを踏まえずに平和を主張しても、今までの平和宣言のように虚しく終わってしまう。

思考を停止して無闇に平和を訴えても、その声は届かない。僕たちが日本人としてやることは、日本を、そして世界を平和に導く真の方法を考えることではないだろうか。そして学生として僕たちがやるべきことは、平和について多く議論を重ねていくことだろう。平和式典はそのことをいろんな人に考えてもらうチャンスであると思っている。

